

せいりょう園

[発行] 社会福祉法人はりま福社会 特別養護老人ホームせいりょう園

〒675-0016 兵庫県加古川市野口町長砂 95-20 TEL 079-421-7156 FAX 079-421-6422

平成29年 2月 第192号 年間購読料1,000円 (1部100円)

メール seiryoen@bb.banban.jp ホームページ <http://www.seiryoen.or.jp>

超少子社会—出生児98万人—の未来をバラ色に —団塊世代がバトンタッチの準備に取り掛かれば—

平成28年の年間出生児数が98万1000人と発表されました。団塊ジュニアが200万人を少し超えて生れて以降40年間減り続けて、昨年に初めて100万人を割り込みました。そして一方で、団塊世代が後期高齢期に入り本格的な超高齢・超多死社会となる『2025年』が近づく中で、介護福祉士の受験希望者が前年に比べて半減した、と報道されました(2/4朝日新聞朝刊)。「『2015年度は16万919人が受験出願したが、16年度は7万9113人と落ち込んだ。』

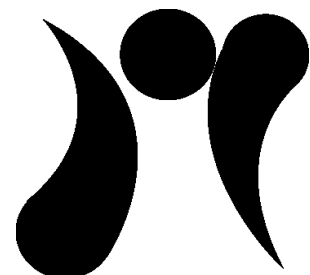
介護保険制度創設より十数年が経ちながらも、親を介護する家族の疲労も、介護現場の職員不足も、より一層深刻さを増す様でもあり、『制度の設計・運用』の中に何か大きな『ミスマッチ』を内包している様にも感じます。団塊の一員として、『今ならまだ何とか、修正が間に合う』、そんな焦りにも似た感覚に襲われます。

少子化が進行する中で最近では、結婚しない若者が増えています。結婚しても晩婚が多く、必然的に高齢出産となって「染色体に異変」が生じ易くなる為、出生前診断の技術開発が進みました。そして染色体異常が確定した胎児の94%が中絶されている、と報じられています。

最近ではまた、生まれて間もない幼児を虐待して死亡させる若いカップルの事件が、頻繁に報道されています。最近の若者にとっては結婚も出産も育児も、「リスクーな変化」として、『避けたい』願望が強くなっている様に感じます。更に最近では子供達が、学校でいじめられて自殺する事件が頻繁に報道されています。さしたる抵抗もせず、逃げもせず、また、親や教師も「学校以外の居場所」を用意せずに、易々と自殺が選ばれている様に感じます。

そして3・11東日本大震災においては、石巻市大川小学校の児童74人が約50分間校庭に待機した後、10人の教師と共に整然と避難を始めて、

(次ページへつづく)



(前ページのつづき)

津波にのみ込まれました。『津波てんでんこ』の教訓は、児童の心にも教師にも宿っていませんでした。

社会を構成して生きる人間が永く引継いで来た、『生きる本能と柔軟な社会性』が、今の子供達には引継がれていないのではないかと強い危惧を抱きます。『何故なのか?』

一人ひとりの身体能力がそれ程高くない人間は、「社会を構成」する事で、永く生延びて来ました。多様で柔軟な人間社会を創り上げ、地球環境の多様な変化に柔軟に応じ得る『本能と社会性』を身に着け、次の世代に引継ぎ、更に変化・発展させて、歴史を続けて来ました。親から子、子から孫へと絶妙に、生きる力と社会性を『バトンタッチ』して来たのです。その原点が、『老いて尽きる命を集団の中で仲間委ねる本能的習性』だと考えられます。

人間以外の動物は全て、『遺伝子情報』のみにより群を維持し、老いて尽きる命は群を離れ、覚悟と誇りを持って限りある命を生き切ります。故に、人間以外の動物は、生殖機能を失った後は、それ程長くは生きていません。

しかし人間は、生殖機能を失った後も相当に長く生きて、遺伝子では伝わらない『思想や宗教』『人間性や社会性』を育み伝える事で、人間社会のみが持つ『文化や文明』を生み出し、『科学や芸術』を創り出しました。そして1000年～2000年と社会を引継ぎ、発展させて来ました。『人が老いて尽きる命』には、遺伝子では引継げない、人間のみが持つ『思想と社会性』が宿っている、と考えられるのです。

介護保険制度は正に其の、『老いて尽きる命に宿る思想と社会性』を、老人から子供達に上手くバトンタッチする為の仕組み、なのです。

平均して10年程もある『要介護期間』を通して上手くバトンタッチをする事は、個人的には多くの困難が生じます。故に、社会的な支援策として介護保険制度を創り、福祉専門職が培ったケアマネジメントの手法を導入しました。『老いて尽きる過程』で生じる様々な生活課題に向き合うご本人を、脇から支え、共に課題に向き合い、解決の途を探ります。ご本人が最期まで主役であり、ご本人の覚悟と誇りに応え、自立と尊厳を護る途を、共に歩みます。そして、命が尽きると同時に『バトンタッチ』が成立します。

しかし介護保険制度がその根幹を『予防』においた為、「老いて尽きる命の役割」が見えなくなりました。「アンチエイジング」・「ピンピンコロリ」の掛け声の下、多くの人が老いてひたすら健康を求め、要介護を嫌い、「介護を迷惑」と受止めてしまいました。そして此の40年間、老人から子供へのバトンタッチが上手く成立せず、生れる子供の数が減り続けて、生れた子の生きる本能や社会性が、明らかに減退しています。

しかし、老いは『自然の摂理』です。全ての人必ず老い、力を失い、介護を支えに生きて、誇り高く死を迎え、バトンタッチを終了します。

『今ならまだ間に合う』。団塊の世代がバトンタッチに備えて、その準備に取り掛かれれば、10年後にはバトンタッチが上手く成立するかも知れません。

戦後の大きな社会変革をリードしてきた団塊世代が、自らの覚悟と誇りを護る『最後の変革』を今こそ始めたい、と切に願います。



小規模多機能より

介護福祉士 衣笠 将弘

私は、せいりょう園に勤めて四年半ほど経ちました。以前は飲食関係に勤めていました。最初は介護にまったく興味がなかったのですが、祖父が生きていたところに一度父より、祖父と自分三人で一泊二日の旅行に行つてほしいと言われました。当時仕事を辞めて東京から兵庫に帰つてきていました。特に用事もなかったのでOKを出し、行くことにしました。祖父とは四年ほど会つておらず、旅行が久々の再会でした。


久しぶりに会つた祖父は物凄くやせ細つており、歩行もふらつき、手伝いがないと歩けない状態でした。元気なころは煙草を嗜み、東京にいた頃によく電話をかけていつも心配してくれた優しい祖父ただだけに、今の状態はショックであり、誰がどう見ても死期が近いと感じました。なぜこんな状態なのに旅行に行こうと誘つたのか疑問に思うと同時に少し憤りを感じました。それから間もなくして祖父は亡くなりました。ここでようやく父がなぜ旅行に行こうといったのか自分なりに理解できました。孫として一番の孝行が出来たかなと感じました。それと同時に自分が旅行についていくしか出来ず、何も出来なかったことに悔しさも感じました。何か出来ることはなかったのか、また学べる場はないのか考えました。

そして、せいりょう園の募集をみて応募しました。飲食関係しか勤めたことがなく、全くの無経験で不安がいっぱいでした。当時、私の中で介護は想像もつかない職種でした。始めの研修では観察を行いました。その時、入居者が、もどかしく動く姿を見て「どうして職員は手伝わらないのだろうか？全部してあげれば・・・」と思う場面が多くありました。介護業務を教えてもらう際に、特養の先輩より色々と教えてもらいました。出来ない部分をお手伝いするが、出来る部分は本人にしていただき、見守るとというのが介護と気付かされました。

その後は小規模に異動となり、特養とは全く違う在宅介護の考えを教わりました。以前住んでいた家のようにしている事が多く、本人の住みやすいように配置しているので、こちらが介護しやすいという事で部屋のレイアウトは簡単には変えられません。

また海外研修にも参加させていただきました。海外の視察では発達した機器類、また自立支援を促す施設の作り等、さまざまなものを視察しました。そして一番発達していると感じた点は高齢者に対する考え方と高齢者自身の考えでした。自分で出来ることはする、症状が進まないように自ら予防していくということでした。根本にある考え方が日本より進んでいると感じました。またせいりょう園で働き、様々な方の看取りを行つてきましたが、そのたびにしっかりケアをして、本人のしたい！という意志をしっかり尊重し、それに応えられたか？というつも考えます。しかし、考えてしまうのはケアに悔いがあるからだと思います。祖父が亡くなった時は不思議とこうしてあげれば・・・という事は感じませんでした。しっかりとケアをしていき最後まで悔いのないケアができるように日々勉強だと感じ、これからも利用者のしたい！という言葉に耳を傾け、また感じ取り、その方々との関わりで悔いのないケアを目指したいと思います。





「介護職員の危機管理」の研修を受講して

定期巡回随時対応訪問介護 介護福祉士 橋本 美穂

介護職員の危機とは…転倒、転落、交通事故、誤嚥などのことです。

このような事故が起こると利用者も家族も職員も辛い悲しい思いをすることになり、職員は責任を感じ精神的に追い込まれてしまうかもしれません。不測の事態に、迅速に的確に対処できるよう事前に準備して、利用者も家族も職員も守ることが危機管理です。しかし転倒事故を避けようと、身体拘束を行う、交通事故に遭わないように部屋に鍵をかけて閉じ込める、誤嚥事故を防ぐために食事介助をやめて栄養補給にするような危機管理ではなく、利用者の尊厳を守りながら、危機管理すること。これを考えることは、せりょう園の理念「自由な行動とその人らしい暮らしの実現」の再確認になることだと思いました。

危機管理の手段として、シナリオ力^{りょく}とコミュニケーション力^{りょく}があります。シナリオ力とは、「ああすればこうなる」と考える想像力、「ああすればこうなるから、こうすればいいのではないか」と考える創造力のことです。コミュニケーション力は介護職員がチームケアするために、職員一人一人の気づきを共有するために必要な力です。コミュニケーションといえば、言葉で伝える、会話のコミュニケーションを思い浮かべたのですが、研修では、記録で伝えるコミュニケーション力のヒヤリハット報告書の重要性を学びました。ヒヤリハット報告書が多いことは事例が多いこと。すなわち、経験が豊富なことが、大事故を防ぐことにつながっていきます。ヒヤリハット報告書を書くことは、犯人探しではなく、書いた人が犯人でもないの、ヒヤリと感じたことを記録し、また読むことで、実際に経験していないことも自身の経験にすることができ、報告書が職員間の共通認識になります。記録は、書くことで事故を分析し、二度と同じようなことが起きないようにしようという意識することも大切ですが、書いたものが読まれて、チームケアに役立てることに意味があるのではないかと感じます。一度でもその物事について考えたことがあれば、危機が迫った時に、あまり動揺することもなく、すぐに行動をおこせ、それなりの対処ができるはず。様々な可能性のある危機を想定し、自分ならどうするかということ、真剣に考える習慣を身につけることによって、危機管理能力は向上していくと思いました。

ハインリッヒの法則（1：30：300の法則）の解説では、1つの大事故の裏には、30の事故と300のヒヤリがあると知ることができ、ヒヤリと感じたときには、タイムリーに、嫌なことこそ、書くべきか迷ったときこそ、ヒヤリハット報告書を書くことが重要なのだということが理解できました。

人手不足や長時間労働による過労死、過労うつ、虐待などの介護職員の危機を防ぐためには、責任感を持ちながらも、介護職はチームケアであることを心に刻み、一人で抱え込まずに、自分自身を守るためにも、「引き継ぎ上手は、仕事上手です。」と言われた講師の言葉が印象的でした。

介護職員に必要な能力、シナリオ力（想像力と創造力）とコミュニケーション力（言葉で伝えること、聴くこと、記録して伝えること、読むこと）の向上が判断力と危機管理能力を高め、せりょう園のケアの質の向上へとつながっていくのではないかと、この研修を受講して感じました。

介護についてみんなで語ろう会

「利用者の外出について」

グループホーム 介護主任 別府 克彦

1月の語ろう会では、昨年10月に交通事故で亡くなられたTさんの話を行いました。

Tさんは四国の生まれで、「家に帰ります。」と深々とお辞儀をして外出される方でした。多い時には1日に5回程、2時間近く黙々と歩き続ける方でした。職員が見守りしている際に、後方の車に気づかずに「危ない」と思うこともありましたが、車道を横切る際は左右確認を行い、道路の段差も軽い身のこなしで乗り越えていました。

職員が気付かないうちに外出され、警察に捜索願を出したこともあります。家族ともカンファレンスを行い、職員間でも付き添い方や外出について何度も話し合いを行いました。

認知症であっても一人の社会人として見守りたい。そう考えてはいましたが、実際にはTさんが外出しようとした際には、理由も聞かずに止めたり、見守る時も、すぐ隣を歩いて目的地を指示する等、『社会人』としてではなく、『認知症の方』として接していることが多くありました。Tさんから、「何で帰ったらあかんの。」「ついて来なくて結構です。」と言われたこともあります。

認知症の方が一人で外出するということにはリスクがあり、多くの施設では入口に電子ロックの鍵を設置して、出入りを制限しています。今回の事故が起きて、せいりょう園全体で話し合いを行いました。入居者の気持ちも分かるし、自分が当事者なら自由に外出したいという意見もありましたが、それでも事故から守りたいという考えの方が多かったです。

Tさんは昔、四国八十八か所巡りをされたそうで、それは他者に迷惑をかけたくないという思いからだったそうです。「家に帰ります。」と頻回に外出されていたのは、そういう気持ちがあったからかもしれません。

世間でも、認知症の方を一人の社会人としてみることは難しいです。外出以外の言動でも本人の意思より職員の意思で物事が判断されることが多いように思います。しかし、この事故をきっかけに、Tさんが身を持って教えてくれたことを、残された我々が大切に考えていきたいです。

【せいりょう園空き情報 平成29年 2月15日現在】

- ・サービス付き高齢者向け住宅「自愛の家さくら」：
A(19.07㎡) 8室、C(24.67㎡) 4室、D(25.16㎡) 2室、E(25.80㎡) 2室
- ・サービス付き高齢者向け住宅「リバティかこがわ」：A(33㎡) 3室、C(39㎡) 1室
- ・ケアハウス：空きなし（バス・トイレ・キッチン付 24㎡）
- ・グループホーム：空きなし ・グループホームまどか：空きなし

[問合せ] せいりょう園 Tel(079)421-7156/(079)424-3433



仏教講話 2月6日 (月)



真宗大谷派 光念寺 本多 正尚 住職

立春を過ぎても厳しい寒さに県内ではインフルエンザの警報が発令されていますが、皆様はいかがお過ごしでしょうか。

本日は今年に入って初めての仏教講話の日です。今まで何度もお話して頂いて親しきを感じます光念寺のご住職様という事で、多くの皆様にご参加して下さいました。

「寒い日によろそ来て頂きまして、ありがとうございます。今日は1月の仏教講話が休みだったので初めてですね。お正月から楽しい事がありましたか？心が浮き浮きするような行事も催される事と思います。待ち遠しいのは嬉しい事ですね。」と暖かみのある言葉をかけて頂き、ご講話が始まりました。

「私は真宗大谷派の光念寺です。本山は東本願寺で、親鸞聖人を宗祖とする宗派のお寺です。親鸞聖人は法然上人のおっしゃられた仏教を伝えられました。ある事が元で新潟県に流罪となりました。その前後に妻帯され、子供もおられました。この頃、仏教と言えば、山に籠って修行し、欲・怒り・愚痴等の煩惱と闘っていく教えばかりで、僧侶は肉を食べたり、結婚する事は禁じられていました。師匠である法然上人から『お念仏を唱えながら、仏教徒として生きていくなら、奥さんをもらってもいいですよ。妻帯して仏教徒として生きていけないなら、止めた方がいいのではないですか。』と穏やかに言ってもらい、妻帯されました。肉を食べ、妻帯していても、本当の幸せになれる事が仏教なのだと明らかにされたのです。」親鸞聖人の話から、お浄土の話になりました。

「仏教は中国を通して日本に伝わってきました。『大乘仏教』と言い、大きな乗り物に皆様一緒に乗って下さい。お浄土まで行ったら悟りを開く、そこまで行くと仏様になります。皆一緒に行くのです。お互いが皆一緒に行きましょう。でも心がけなければならない事が6つあります。『六波羅蜜』と言います。



厨房だより

管理栄養士 田村 愛弓

2月上旬に立春を迎えましたが、まだまだ寒い日が続いています。

2月10日せいりょう園が主催する男性料理教室では、少し早いバレンタインチョコを作りました。

男性料理教室のはじまりは3年前、男性介護者の方向けに「少しでも介護の助けになれば」という思いから始まりました。今でもその思いを胸に活動を続けていますが、最近では違った側面での支援にも繋がっています。参加者同士、和気藹々と調理を行う中で他愛もない話をしたり、様々な情報交換の場にもなっています。一人孤立するのではなく、他者との関わりを持ち社会に参加する。料理を学ぶ以外にも、少しでも参加者の方に有意義なものになっていると思うと、嬉しく感じます。

男性料理教室では、女性や介護をしたことのない方も参加できます。

一度気軽に覗いてみてください。

1. 布施 (ふせ) : 自分の事は考えずに他人の為に何かする事です。温かい言葉をかけたりする、明るく優しい顔で接する等がそうです。お坊さんにするお礼だけではありません。見返りを求めない行為です。
2. 持戒 (じかい) : 約束を守り、自分勝手に生きるのではなく、ルールを守った生き方をします。
3. 忍辱 (にんにく) : 悲しい事や辛い事があっても耐え忍ぶ事です。
4. 精進 (しょうじん) : 最善を尽くして努力する事です。
5. 禅定 (ぜんじょう) : 心を落ち着けて動揺せず、平静に保つ事です。
6. 智慧 (ちえ) : 無分別に良い、悪い、美しい、醜い等に分けずに真実を見極め、知識ではなく智慧の心で考えていく事です。」と教えて頂きました。

次に医師の岩村先生がネパールに行かれた時の話をして下さいました。先生が山の中で治療を施して来られた時の話です。村で病気のおばあさんに出会いました。診療所まで連れて行くのに困っていると、通りかかった若い農夫の方が、同じ方向だと言って、診療所まで3日間背負って歩いてくれました。先生がお礼を渡そうとされるとその青年は「僕はお金をもらおうと思って背負ったではありません、ばかにしないで下さい。」と言いました。先生は「何で背負ってくれたのですか？」と尋ねると「皆、共に生きる為です。たった3日間だけでも共に生きようと思っただけです。」とそれだけ言ってスタスタと歩いて立ち去って行きました。青年の服はボロボロで足は裸足でありました。先生は日本に帰ってからこの話をされたそうです。ご住職は「人間同士共に生きる為に力を貸してくれた。その青年の言葉を忘れずに生きて行こう。それもお布施の心です。大きな乗り物に乗せてもらって、共に浄土に行き、人間として生きている事は、それが阿弥陀様の呼びかけなのです。頂いた中でのご恩返しが出来たらと思います。生きる事で次の世代に手渡しし、お返しさせてもらえたらと思います。」と話され、ご講話が終わりました。

今日は共に、仏教徒として浄土に行く『六波羅蜜』の心を教えて頂きました。ありがとうございました。
(岡村 照代)

☆男性介護者の為の料理教室のお知らせ☆



曜日；毎週金曜日 時間；13：30～15：00
参加費；1回300円
場所；小規模多機能「輝きの家ながすな」デイルーム



3月の献立予定

3日；ひなまつり献立	【担当】藤本 あや（調理師・栄養士）
17日；春の彼岸“ぼたもち”	10日；ファミリー♡ホワイトデー
31日；玉子と豆腐を使って…	24日；春キャベツたっぷり使って…

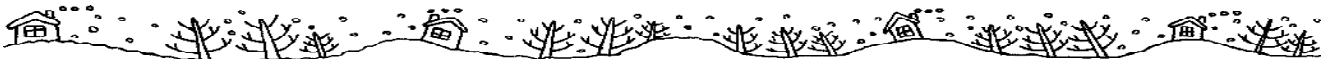
☆春の風物詩“いかなごのくぎ煮”を作ります！！
※年齢・性別は問いません。お気軽に、のぞいてみて下さい。

平成29年1月20日(金) 晴香うららさん 新春コンサート



今年最初の新春コンサートが開催されました。まず一曲目は、「関東一本締め」の曲に合わせて晴香うららさんの“お手をはいしゃぐ”の掛け声と共に全員で一本締めを行いました。

冬にちなんだメドレーに始まり、参加者にマイクを向けて、懐メロと一緒に歌いました。「恥ずかしかったけど、自分の声がマイクを通して会場に流れると楽しかった。」と言われました。うららさんと握手された方は「とても温かい手でした。」と感激されていました。(デイサービス 職員一同)



平成29年1月29日(日)、30日(月) 信楽焼の「ひな人形」作り



捏ねた土で、お顔、着物、扇子に烏帽子、笏を造り、着付けして、袂に桜模様を描く等、先生ご指導の下、楽しく手を動かしました。特に目・口を描く時には「どうしよう。」「可愛く出来るかな?」と声に出しながら、オリジナルひな人形を完成させました。2月12日に窯で焼き、陶器のひな人形の出来上がり!! 男雛・女雛の表情が造った人によって個性があり、愛着を感じる宝物となりました。

(ケアハウス 入江 良行)



平成29年2月4日(土) 音楽レクリエーション



節分では参加者が鬼や桃太郎の姿になり、バレンタインではタキシード姿とドレス姿の参加者が「愛しちゃったのよ」を熱唱。建国記念日に因み、唱歌「紀元節」が流れると皆さん口ずさんでいました。また歌に合わせてマラカスや鈴、鳴子を鳴らして盛り上がりました。

湯島の白梅劇では、名セリフ
早瀬; 月は晴れても心は暗闇だ。
お薦; 切れるの別れるのって、そんな事は芸者の時に云うものよ。.....私にゃ死ねと云ってください。

このセリフを云い、皆さん役者気分になりました。

季節を感じる盛り沢山の内容で、あっという間の1時間でした。(地域密着型特養; 齊木 和真)